神話と神秘の陰
超絶主義者のオリエント像と政治的無意識

佐藤光重

ソロー文学の地層（意識）―Purity と Commodity

ソロー『ウォールデン』には意識、潜在意識、無意識の三層構造が地層のように積み重なり、その無意識のレベルには 19 世紀の中東世界が潜むと考えられる。『ウォールデン』で語り手が意識的に描くのは、しばしば商品化（Commodification）への呪いと清浄無垢（Purity）への憧れである。「湖」の章でソローは湖が森の透明な眼球であることを発見する（180）。語り手は自然の purity を賞賛するとともに、底知れぬ叡智の謎（mystery）に魅了されてもいる。他方で、こうした自然の礼賛に対比して、同じ章には自然を人間の所有物であるかのようにあつかう商品化を呪詛している。市場経済への呪詛と対局に置かれて賞賛されるのは、湖や果実とならび、東洋の古典や神話である。ソローが礼賛する古典は当時のオスマン・トルコという意味での広義の中東の文献も含まれる。「経済」の章末尾には purity への憧れとして１３世紀のペルシア詩人 Sadi の作品 *Gulistan*（『バラの園』）が登場する。ウォールデン湖とならび純粋であり神秘のベールをまとうものが、ペルシアやアラブの古典的聖典であり、ソロー文学では市場社会の利害を超えたところに措定された神秘と純粋性の世界を象徴する。

潜在意識の地層―奴隷制度批判

「経済」の章で問われるのは冒頭より労働（labor）の在り方であって、森で暮らすあいだ「自分の手による労働のみ」（labor of my hands only）で生きてきたという言葉で書き始める。これは神の見えざる手（invisible hand）への対抗であることはもちろんのこと、奴隷制に依存しない社会の在り方を考察する態度の表明でもある。搾取されるアイルランド移民の労働を批判した章「ベイカー農場」において、奴隷制に依拠しない社会が「唯一真正のアメリカ」という言い方で端的に表してある(198)。商業には奴隷制が不可分に組み込まれているがゆえに、人間を商品化する商業を呪詛し、そうした商業体制から自由な領域として、Leo Marx のいう “Garden”「楽園」という純粋な世界を追い求める、というのが、『ウォールデン』に潜む心の働きの地層構造であろう。

無意識の地層―中東貿易とニューイングランド経済

だが、奴隷制度は『ウォールデン』の purity の背後にある無意識とは言えない。なぜなら、奴隷制批判はソローの意識的行動であるからだ。では『ウォールデン』での無意識とはなにかというと、ニューイングランドと中東世界との取引にまつわることがらである。ソローは 1840 年 10 月 11 日付の日誌に John Lloyd Stephens の旅行記 *Incidents of Travel in Egypt, Arabia Petra, and the Holy Land* (4th ed. 2 vols. Harper, 1838)を読んだことを記している（PJ 1: 186-87, Sattelmeyer 274 number 1287）。ニューヨーク生まれの商人で、当時の中東世界であったオスマン・トルコとアメリカの交易のためにスミルナに貿易の拠点を築いたのがスティーヴンズである。スティーヴンズにはこの旅行記につづき、ロシア・トルコ滞在記 *Incidents of Travel in the Russian and Turkish Empires* (London, 1839, 2 vols)を出している。こちらはソローが読んでいたのか不明だが、ここでスティーヴンズは、ボストンやセイラムの貿易商が当時のイスラム大帝国オスマン・トルコとの取引において先陣を切っていたことを記している。その開拓的事業とは、アヘン取引なのである。アメリカはスミルナを拠点にして 1804 年よりアヘンを中国に輸出しはじめた。このときスミルナへ商船を派遣していた主要な港町はボストンとセイラムであり、パーキンスやピーボディーといったこの土地の商人たちがアヘン貿易網を開拓していったのであった（Finnie 30-31）。アヘンと交換されたアメリカ側の主要な輸出品が、ニューイングランド産のラム酒であった。スミルナでは「ボストン名産品」（Boston Particular）という愛称で親しまれていた（Finnie 31）。

ソローと親交があったナサニエル・ホーソーンの妻ソファイアはセイラムには多いピーボディー家の出身であり、結婚前には片頭痛を始めとする不定愁訴に悩まされたときに治療のためアヘンチンキを処方されたこともあった（Mellow 6-7)。若い頃より結核を患ったソロー自身は、結核の末期に、友人である詩人エラリー・チャニングから痛み止めとしてアヘンを薦められた（Walls 497）。『ウォールデン』の章「より高い法則」にも、アヘンを忌避する一節がある（345）。この中東との関係性がいかに『ウォールデン』に隠れているかを調べるのに、ラム酒を悪魔と呼ぶ「先住者と冬の訪問者」の章はうってつけである(248)。十九世紀初頭にはボストンだけでもラム酒蒸留所が 40 カ所あったという（250. n. 29）。このラム酒は 17 世紀から 18 世紀にかけて、ギニア海岸で黒人奴隷を贖う代価となり、この奴隷たちは西インド諸島でサトウキビを作らされた。このサトウキビを使ってニューイングランドの名産であったラム酒は製造された。

「先住者」の章にはなぜかソローの母方の遺伝病である嗜眠症の話が挿しはさまれる(250)。ソローが母親に宛

てた手紙（1843 年 7 月 7 日付）には、母の祖父ジョーンズ家の遺伝病体質を表す比喩としてケシの実からとった果汁、すなわちアヘンのイメージが喚起されている。本章は潜在的には奴隷貿易を糾弾するエレミアの嘆きでもある。しかし、ソローはこうした住居跡の探索を、考古学者 Austen Henry Layard のメソポタミア発掘になぞらえていた（255-56, n. 68）。先住者の住居跡を訪れるときの心境が、1857 年 1 月 11 日の日誌にうかがわれる(J 9: 214)。先住者の屋敷跡をめぐるソローの想像世界において、隠されているイメージがここで明らかになっている。ソローはレイアードの著作を読み、『ウォールデン』執筆を重ねていた 1850 年 6 月から 53 年 12 月の期間の日誌にも複数言及箇所がある（256, n.73）。本章でコンコードとは、中東の廃墟に比較される心象風景なのである（J 7:196）。これらが表立って『ウォールデン』のテクストに登場しないのは、中東との商取引が直視できないアヘン貿易であり、つまりは『ウォールデン』の政治的無意識だったからではないかと考えられる。

フラー「エジプトの話」

このことはまた、『ウォールデン』が現実の中東世界を直視せず、現実から目を背けるため、無意識に古典と神秘のアラブ世界を描き出したということでもあって、まさに生きている同時代のアラブは見ないという点で、Said のいうオリエンタリズムの構図に当てはまる事例なのである。この点で比較対照として注目したいのが、マーガレット・フラーの短編「エジプトの話」（“A Tale of Mizraim”）である。この短編は 1841 年 12 月にクリスマス・ギフト用のアンソロジー、*Token*（1842 年号）に収録された。ヒロインの Zilpa はフラーの創作である。本作でジルパはみなし子でありながら Moses や Aaron を叔父、Miriam を伯母と呼んでおり、彼らの養女という設定である。他方、ジルパはエジプト王女 Thermutis の庇護を受け、王子 Armais からひそかに求婚されており、王子の姉妹 Amure の子供を養育する。ジルパというユダヤ人のみがフラーの創作であるので、彼女が二つの民族と宗教のはざまに置かれる人間関係には深いメッセージを読み取るべきであろう。人間関係においては、愛する王子 Armais と父親代わりのモーセらとの間にジルパは葛藤し、宗教的にもユダヤ教とイシス信仰との間で苦しむ。クリスマス向けの書物に収められた、出エジプト記にもとづく筋書きでありながら、ジルパの葛藤により本作はユダヤ・キリスト教にとっての異教徒の視点を提供している。この物語がたとえユダヤ・キリスト教的な枠組みで語られていても、読者はヒロインの葛藤や死に同情せざるを得ないであろう。ユダヤ・キリスト教の一元的世界像と「異教」徒の価値観との共存の在り方を模索したフラーの姿勢がここに認められる。

ニューイングランドの中東をめぐる資本主義の簒奪は、ソロー『ウォールデン』においては神秘と神話のベールに覆われている。これに対してフラー「エジプトの話」は一人のヒロインの葛藤を通して、一元的な価値観に疑問を呈する性格を有しており、アラブ世界の人間を個人として描こうとする。これはわたしたちが今日の中東について、まず関心を持ち続けること、犠牲者とは人数のことでなく、ひとりひとりが人間であることを想起させてくれるであろう。

Finnie, David H. *Pioneers East: The Early American Experience in the Middle East*. Harvard UP, 1967.

[Fuller, Margaret]. "A Tale of Mizraim" originally published in the 1842 *Token*. Reprinted in Jeffrey Steele, “A Tale of Mizraim’: A Forgotten Story by Margaret Fuller.” *The New England Quarterly*, Vol. 62, No. 1 (Mar., 1989), pp. 82-104. URL: https://www.jstor.org/stable/366212

Layard, Austen Henry. *Discoveries among the Ruins of Nineveh and Babylon ….* Harper, 1853.

Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. Johns Hopkins UP, 1998.

Sattelmeyer, Robert. *Thoreau’s Reading: A Study in Intellectual History with Bibliographical Catalogue*. Princeton UP, 1988.

Stephens, John Lloyd. *Incidents of Travel in Egypt, Arabia Petrae, and the Holy Land*. 4th ed. 2vols. Harper, 1838.

---. *Incidents of Travel in the Russian and Turkish Empires*. Richard Bentley, 1839.

Thoreau, Henry David. *The Correspondence of Henry David Thoreau*. Edited by Walter Harding and Carl Bode. Greenwood P, 1958.

---. *Journal 1: 1837-1844*. Edited by Elizabeth Witherell, William L. Howarth, Robert Sattelmeyer, and Thomas Blanding. Princeton UP, 1981.

---. *Journal 7: 1853-1854*. Edited by Nancy Craig Simmons and Ron Thomas. Princeton UP, 2009.

---. *Journal IX: August 16, 1856-August 7, 1857*. The Writings of Henry David Thoreau. Edited by Bradford Torrey. Houghton Mifflin, 1906.

---. *Walden*. A Fully Annotated Edition. Edited by Jeffrey S. Cramer. Yale UP, 2004.

Walls, Laura Dassow. *Henry David Thoreau: A Life*. U of Chicago P, 2017.